

原著論文

道徳教育の現状と道徳の教科化、 「特別の教科 道徳」の今後のあり方 —学習指導要領の改訂を通して—

征矢野 達彦

The present circumstance of moral education and subject of morality,
About the future of "special subject of moral"
— Through the revision of course of study —

SOYANO Tatsuhiko

要 旨

2008(平成20)年3月に新学習指導要領の改訂が告示されてから、道徳教育の充実が大きなテーマになり、第二次安倍内閣の教育再生実行会議の第1提言では、いじめ問題等の対応のために、道徳の教科化が提案され、教科化の動きが加速した。この時点で各方面から指摘された課題や問題点を省察し、2015(平成27)年3月に学習指導要領の一部改訂の告示が公示され、「特別の教科 道徳」が生まれることとなった。その動きを振り返り、これからの道徳教育はどうあるべきかについて論じた。

キーワード

道徳の教科化、「特別の教科 道徳」

目 次

- I. はじめに
- II. 道徳教育 教科化への動き
- III. 長野県道徳教育学会の対応
- IV. これからの道徳教育
- V. おわりに —待ち遠しい道徳の授業に—

謝辞

文献

I. はじめに

初等、中等教育において道徳教育が教科化され、教科書も準備されるという状況が出てきた中で、これまで道徳教育に携わってきた教師達が今後どのような対応をすべきか、これから教員を目指す学生達に向けてどのような指導を行うべきか、探求すべき課題は多い。

道徳の教科化が進んだ背景の一つには、学校現場での対応が追いついていないように見える「いじめ問題」などがある。その背景には、子ども一人一人のこころの問題だけでは律しきれない、家庭の問題を含む社会的な課題も複雑に絡んできていると思われる。しかし、道徳の教科化導入の経緯からして、「特別の教科 道徳」によって、こうした課題の解決ができると期待されてもいるだろう。

このような視点からも、教科化された道徳の授業を充実させ、子ども達の成長に資する内容にまで高めることが出来るかどうか、今後を方向付けるであろう。

本稿では、まず次章で道徳教育の教科化への動きを振り返り、次に3章で長野県道徳教育学会がこれまでどのように初等・中等の道徳教育に取り組んで来たかを、具体例を交えてまとめる。その後4章では、これからの道徳教育について、どのような内容やそれを現実化するための教育手法が求められるのかについて考察する。最後に全体をまとめ、今後の方向性に言及する。その後、謝辞を述べ、参考文献をリストアップする。

II. 道徳教育 教科化への動き

教科化への動きを、教育再生会議や中央教育審議会の活動を中心にして、その概要を下記表1にまとめている。

1. 教育再生会議、中央教育審議会

2006（平成18）年10月10日に、二十一世紀にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を図っていくとの目的で、第一次安倍内閣に設置された教育

表1 道徳教育 教科化への軌跡

2006（平成18）年10月10日、第一次安倍内閣で教育再生会議設置。 二十一世紀にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を図る目的
2006（平成18）年12月15日に、教育基本法が改正される。 教育の目的を「人格の完成」として強調。
2007（平成19）年6月1日、教育再生会議の第二次報告書発表。 「徳育を教科化し、現在の『道徳の時間』よりも指導内容、教材を充実させる」 三次の報告では、さらに踏み込み「徳育を『教科』とし、感動を与える教科書を作る」とし、「徳育を『新たな枠組み』により教科化し、年間を通じて指導する」と続く。 しかし、中央教育審議会は、検定教科書や成績をつけることはなじまないと判断し、実現には至らなかった。
2008（平成20）年3月28日、新学習指導要領を告示。改訂の目玉は「道徳教育の充実」。
2013（平成25）年2月26日、第二次安倍内閣の教育再生実行会議の第一次提言で、いじめ問題等への対応等で「道徳の時間」を教科化することを再度提案。
2013（平成25）年12月26日、文部科学省の有識者会議「道徳教育の充実に関する懇談会」から「今後の道徳教育の改善・充実方策について」という報告書。小中学校の「道徳の時間」を正式の教科として位置づけるように提言。
2014（平成26）年10月21日、中央教育審議会「道徳に係る教育課程の改善等について」を答申。道徳の時間について「特別の教科 道徳」として制度上位置付け。
2015（平成27）年3月27日に、学校教育法施行規則の改正。小学校・中学校・特別支援校の学習指導要領の一部改訂の告示が公示。
2015（平成27）年4月1日、改訂学習指導要領は実施可能となる。
2018（平成30）年4月1日から、小学校にて全面实施。
2019（平成31）年4月1日から、中学校にて全面实施。

再生会議がある。2007(平成19)年6月1日の第二次の報告書には、「徳育を教科化し、現在の『道徳の時間』よりも指導内容、教材を充実させる」の文言が急に発表され、物議を醸し始めた。第三次の報告では、さらに踏み込んで「徳育を『教科』とし、感動を与える教科書を作る」³⁾とある。さらに、「徳育を『新たな枠組み』により教科化し、年間を通じて指導する」³⁾と続く。しかし、中央教育審議会は、道徳教育に検定教科書を指定したり、成績をつけたりすることはなじまないと判断し、実現には至らなかった。

そして、第二次安倍内閣の教育再生実行会議では、2013(平成25)年2月26日の第一次提言において、いじめ問題等への対応に向けて、道徳教育の充実を掲げ、6年前に実現しなかった前掲の「道徳の時間」を教科化することを再度提案するに至った⁴⁾。この提言を受けて、教育界はもちろん、子どもの健全育成に関わる団体や行政でも、「道徳の教科化」が話題になった。賛成・反対、あるいは慎重論もでていた。それぞれの主張に基づいて、議論が進むのはいいことだが、まだ十分議論が煮詰まらないうちに、結論を急ごうという傾向も見えてきた。

2013(平成25)年12月26日、文部科学省の有識者会議「道徳教育の充実に関する懇談会」では、「今後の道徳教育の改善・充実方策について」⁵⁾という報告書をまとめ、下村博文文科大臣に提出した。報告書には、小・中学校の「道徳の時間」を正式の教科として位置づけるように提言している⁵⁾。

2. 「特別の教科 道徳」の全面实施へ

前掲の有識者会議の提言もあって、2014(平成26)年10月21日の中央教育審議会の「道徳に係る教育課程の改善等について」の答申で、道徳の時間について「特別の教科 道徳」として制度上位置付けられた。

道徳教育の抜本的な改善に向けて、学習指導要領の道徳教育の目標、内容の明確化・体系化を図るとされ、「指導方法の工夫」「生徒の評価の在り方」「検定教科書の導入」「教員の指導力向上方策」「学校と家庭や地域との連携強化の在り方」など、道徳教育の改善・充実に向けて必要な事項が示された⁶⁾。

それを受けて、2015(平成27)年3月27日に、学校教育法施行規則の改正があり、小学校・中学校・特別支援校の学習指導要領の一部改訂の告

示が公示された。この中で「特別の教科 道徳」の目標は、『よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の生き方(人間としての生き方)についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる』(括弧は中学校)⁷⁾である。この改訂学習指導要領は、2015(平成27)年4月1日より実施可能となり、小学校は、2018(平成30)年4月1日から、中学校は、2019(平成31)年4月1日から全面实施されることになる。

Ⅲ. 長野県道徳教育学会の対応

筆者が現在長野県道徳教育学会の副会長の任にあるということから、こうした動きに対して学会がどのような対応をとろうとしてきたのかを概観しておく。

1. 新学習指導要領に対応した要としての「道徳の時間」

2008(平成20)年3月28日に告示された新学習指導要領の目玉はなんといっても「道徳教育の充実」である。これを契機に、長野県道徳教育学会は、今まで40年余にもわたって取り組んできた成果や課題をふまえ、今後を見通して、道徳教育全体のあり方を押さえつつ、「道徳の時間」について実践的に研究し、深めあう集団として、事業を見直し、子ども達が人間として正しく逞しく生きようとする力を育てるための活動を追求した。そこで、「道徳の時間」を真に有効な時間とするために、何をしなければならないのかを、問い直すところから始めた。

もとより「道徳の時間」は、望ましい行為ができ、人間らしく生きる「道徳性」を養うことを目標にしている。それは人格形成にかかわる大事な部分である。2006(平成18)年12月15日に改正された教育基本法では、教育の目的を「人格の完成」として強調している。その人格を形成する最もベースになるのが、道徳性だといってもいい。その道徳性を、学校教育の中で、計画的・発展的に指導するのが道徳教育である。

そこで学会では、教科・各領域との関連を図りながら、道徳性の育成を根幹にすえて、幅広く学校教育課程全体の中で、恒常的・意図的に「価値の自覚」にかかわる活動や授業を進めていく必要が

あると考えたのである。

新学習指導要領では、道徳教育は「道徳の時間」を要として、学校の教育活動全体を通じて行うものであることを、従来の学習指導要領よりさらに明確に示している。要としての「道徳の時間」に、ねらいや道徳的価値の様相に角度づけた授業を進めていくのはもちろんだが、2008（平成20）年度の長野県道徳教育学会のテーマ「喜びを持って、自らの生き方を求めていく」にあるように、価値の自覚につながる満足感のある授業や、活動との連携指導を工夫し、生き方につながる授業を創っていくことを求めたのである。

2. 新学習指導要領に対応した道徳教育の実践に向けて

松本地区において、いくつかの道徳の授業を参観した。

(a) 松本市M中学校の例 -内容項目2の⑥「感謝」-

松本市のM中学校では、新学習指導要領の改訂で新たに付け加えられた内容項目2の⑥「感謝」を取り上げ、3年生の授業を公開した（資料1参照）。生徒の実態にそった自作資料だったこともあり、登場人物に寄せて、自分の体験を語る場面が続いた。自分の体験や行為に基づいて語ることで、自分自身の生き方を見つめ直し、価値の自覚を深めることになったと思っている。友に支えられて生きていることの実感が、感謝につながっている。3年生の開かれたクラスに、発達に応じた考えの深さがある授業となった。普段からの継続的な道徳の授業の成果と、担任と生徒の信頼関係を感じさせた。

(b) 学会での夏期研修会の開催 -話し合い-

実は、この授業に至るまでに、松本市周辺の道徳教育学会の有志で、夏休みに泊まりの夏期研修会を行っていた。資料分析を通しての話し合いでは、前述のM中学校の先生から、指導内容にあわせて、授業の構想を複数提案していただいた。新しく指導内容に加わる「感謝」の扱いから、生徒の心を揺さぶる資料の可能性、教材化を検討した。

また、A中学校の先生からは、指導内容2の③「友情の尊さ」についての指導案が提示され、主眼に沿って、資料分析と展開の検討をした。資料分析や資料の扱い、中心発問、展開等を考えあう中で見えてくるものがある。迷いもある。必ずしも結論が出るわけではないが、授業者にとって、少しでも参考になる方向が出てくるのが重要である。

泊まりの研修会は、時間にとらわれず、自由に話し合える点に意義がある。少なからず道徳教育に関心がある仲間が、個々の課題や悩みを出し合い、積極的に関わり合う中で、仲間の支えや励まし、貴重な意見があって、一歩が踏み出せる。共同で研究しあう時間の良さは、教師としての内的成長を含め、人とのつながりにある。これも「道徳の時間」の充実につながる大事なものである。

こうした研修の成果が、前述のM中学での公開授業の自作資料となっていた。

(c) 学会での夏期研修会の開催 -学び合い-

研修会では、吉岡正幸先生の「子どもと道徳」の読み合わせもした。吉岡先生は、同著の中で、「道徳の指導は、子どもたちの道徳的自覚を深めることにある。道徳性を深化させることにある。道徳の時間における指導は、その道徳性（道徳的な態度・道徳の実施を可能にする性向・能力）を深化させようとするところに直接の目的がある。」¹⁾と述べている。また「子どもの道徳性に注目し、道徳にどのように対するか、道徳をどのように受け止めるか、その瞬間に焦点をあて、道徳の指導を考える。道徳の指導の根本は、そこからであり、そこへである。」²⁾との考えを基礎に置いている。その具体的な実践の中身についても学ぶべき点がたくさんある。

3. 「道徳の時間」の改善に向けた学会での活動

道徳の時間の目標は、道徳的実践力を育成することにある。道徳的価値の自覚を深めることに加え、自己の生き方についての考えを深めることも、2008（平成20）年3月28日に改訂された新学習指導要領の中にある。具体的には、自分の生活を見つめ、自分自身を知り、課題に気づき、自己の成長を実感させる展開を考えていくことである。それには、何よりも道徳の時間を確実にを行うことを前提にし、教科等で行う道徳教育と関連させ、統合・深化する時間でありたい。

不易と流行は、「道徳の時間」の中にもある。先輩の先生方の実践の不変なものに学びながら、「楽しい道徳の授業」を目指して、いろんな進め方・深め方をみんなで考え合い、試行錯誤していくこともいい。また、長野県道徳教育学会の進める研究の機会を活用して、内容理解を深めたり、生徒の実態にあった資料の選択や開発に努めていく必要がある。県下の各支部でも、同好の仲間を増やし、道徳教育の果たす意味を改めて認識し合い、お互いに力量を高めあっていきたい。さらに長野県道徳

教育学会の一員として、支部の活動を通して、本学会の発展にも努めていきたい。

IV. これからの道德教育

これまで、文部行政の側からの動き、長野県道德教育学会の対応などをみてきたが、この章では、道德教育が教科化されたことに伴って、今後どのように対応すべきであるかについて言及する。

1. 今の道德教育で、何が課題なのか

「道德教育の充実に関する懇談会」の「今の道德教育の改善・充実方策について（報告）」2013（平成25）年12月26日では、「教科化」に向けた今の道德教育の課題が次のようにまとめられている（下記表2参照）。

また、一部には「現在の道德教育は機能していない」と言いきる人もいるとの指摘もある。換言すれば、「先生方は道德の指導力があまりなく、年間35時間の道德の授業をきちんとやっていない」ということだ。「その結果として、いじめは起こり、子どもの心は十分育っていない」との見解が見える。道德教育の現状をこのように認識し、抜本的な改善策として、「特別な教科」として位置づけることが適当であるとしたのだ。

2. 教科にした時の問題点は何か

制度上から見ると、教科にするには学習指導要領の改訂の問題がある。さらに学校教育法施行規則の改正も関わってくる。

なおかつ、教科書・評価の問題がついてくる。教科化で検定教科書を使うことに対して、「価値観の押しつけだ」と反対する人もいる。子どもの価値観の育成に関わる道德について、検定教科書の基準はどうなるのであろうか。今まで、道德の指導内容と学級の子どもの実態から、工夫して授業を組み立ててきた自由度はどうなってしまうのだろうか。他領域との関連指導で成果を上げてきた実践は、国のチェックを受けた教科書に左右されかねない。

教科書に沿って「教材を教える」授業をしていればいいというのは道德の授業ではない。検定基準そのものに、国の発想や思惑が入り、教科書としての中立性は保てるのだろうか。

学習評価に関わっては、5段階の数値によるものではなく、子どもの意欲や可能性を引き出す記述式にするよう、先の「道德教育の充実に関する懇談会」の「今の道德教育の改善・充実方策について（報告）」2013（平成25）年12月26日では、求めている⁵⁾。これは当然のことだ。人格形成に関わる心の育成に、数値による評価はなじまない。教科化に伴う道德の学習評価は、かなり重要な課題である。道德の時間の授業によって、子どもが道德的価値の自覚について、どのように変容したのかの記述と、子ども自身による自己評価を大事にしたい。いずれにしても、教科化により学習評価に関わる教員の負担は、増すことになる。子どもの心の内面の評価をしなければならないが、難しいため目に見える子どもの行動を重視することにもなり、教員の前だけいい子になる子どもが育たないのか。とにかく価値観の伴う評価は難しい。

3. これからの道德教育 —教師の指導力強化—

道德教育の大切さを認識し、実践を進めている長野県道德教育学会は、国の教科化の動きの中で、その変化を見据えて、我々ができることは何かを考え、「人間としてよりよく生きる力を育む」道德教育を研究していくことが焦眉の課題となる。

道德教育が、人格を育む学校教育の基盤であるとするれば、「道德教育の全体計画」や「道德の時間の年間計画」を見直し、実効ある計画にしていける努力が必要となる。また、長野県道德教育学会の平成26年度の研究テーマである「道德的実践力の育成」に関わって、内面的資質の高まりをどう手助けしていくのか。道德教育に関する理解や道德教育研究の充実、道德の時間の指導方法のあり方を工夫・改善し、今まで本会が研究してきたことに自信を持って、教師の指導力のアップを図っていききたい。

表2 道德教育の充実に関する懇談会報告にみる道德教育の課題

- ・歴史的経緯に影響され、道德教育そのものを忌避しがちな風潮がある。
- ・道德教育の目指す理念が共有されていない。
- ・教員の指導力が十分でなく、道德の時間に何を学んだかはっきりしない。
- ・他教科に比べて軽んじられ、他の教科に振り替えられやすい⁵⁾。

今回の「教科化」をきっかけに、長野県の各校で道徳教育の重要さを再確認し、「道徳的価値の自覚」を目的とする指導法の質的充実が求められる。これを現場で担う現役教師陣やこれから教職に就こうと学んでいる学生達の、この分野での実力養成が大きな課題となってくることは間違いない。

4. 道徳教育の抜本的改善・充実

道徳科に検定教科書を導入することに向け、具体的な改善ポイントがいくつかある。内容について、①いじめの問題への対応の充実や発達の段階を一層踏まえた体系的なものにすること。②「個性の伸長」「相互理解、寛容」「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際親善」「よりよく生きる喜び」の内容項目が、小学校に追加されたこと。③問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法の工夫を図ること。④評価は、数値評価ではなく、児童・生徒の道徳性に係る成長の様子を把握して行うこと⁸⁾。

これらの改善によって、発達の段階に応じて、答えが一つではない道徳的な課題に対して、一人一人の児童・生徒が自分自身の問題としてとらえ、向き合い「考える道徳」「議論する道徳」への転換を図っている⁸⁾。日々の着実な実践により、児童・生徒の道徳性を育成しようというのだ。

松本大学で「道徳の指導法」を受講している教職を目指す学生に、小・中学校で受けた道徳の授業で、心に残っている授業を書いてもらったところ、40名中4分の3の学生は、心に残っている授業はなかったという。4分の1の学生は記入し、印象に残っている題材は、「いじめ」に関わる内容が多かった。いかに自分と関わって真剣に考えたかが想像できる。しかし、9年間も道徳の学習をしてきたのに、多くの学生が心に残っていなかったということに愕然とした。

この道徳の教科化の今、「道徳教育とは何か」もう一度、真剣に考えてみなければならない。教育基本法には、教育の目的を「人格の完成を目指す」とある。人格の基盤になるものに道徳性がある。道徳教育は、その道徳性を育てることを目的とする。つまり、自己を見つめ、人間としての生き方を考えることである。自己を見返し、自己との対話を通して、人間としてあるべき自分の生き方を考えることである。道徳的価値をフィルターにして自己を見つめ、これからの自分自身を育てようとする意欲や態度を持つことだと考える。これは今までも、今後も変わ

らないことだろう。

V. おわりに —待ち遠しい道徳の授業に—

「特別な教科 道徳」となっても、「道徳の時間」の本質部分は変わったわけではない。道徳教育の目的を踏まえた効果的な指導を、一層確実に展開していきたい。今までのように、登場人物の心情理解中心になりがちだった指導ではなく、児童・生徒が、また教師が、「心待ちにする道徳の授業」ができれば、道徳の授業が本来の目的に沿った真に生きたものになる。そのためには、どうすればいいのだろうか？

1. 考える授業、議論する授業への転換 —他者との関わりの中で—

今回の道徳教育の改善のキーワード「考える授業」「議論する授業」を基本とすれば、道徳の授業の実施に関わって、我々の意識改革が必要になってくる。目の前の担任している児童・生徒の未来を考え、自分自身の人生を切り開いていく「生きる力」につながる力を育てていかなければいけない。また、「自立した一人の人間として、他者とともによりよく生きる人格を形成することを目指す」(道徳教育の充実に関する懇談会 平成25年12月10日)にあるように、自分のことだけでなく、他者との関わりの中で考える視点も必要になってくる。そのためにまず「問題解決的な学習」を考えることも必要である。学習課題に対して相手の立場に立って、自分との関わりの中で考えるために、ロールプレイングや他領域の体験的な活動を生かすのも有効的だ。その学習過程で人間としてどう生きるかを「考える」ことにつながる。このようなPBL型のアクティブラーニングを取り入れた教育手法の開発も有効な充実策になるだろうと考えられる。そのためにも、これから教師を目指す学生達も、大学生時代にこうした手法で学び、技能を磨く必要があると思われる。

2. 求められる道徳教育に携わる先生方の努力

道徳教育が、大きな変換点を迎えている今、個人だけでなく、長野県の各郡市の同好会や委員会で、自校の「道徳教育の全体計画」や「道徳科の年間計画」「各教科・他領域との連携指導」「道徳科の評価のあり方」の見直し・検討が急務となる。道徳教育学会をはじめ、道徳教育を何とかしたい

と思う先生方で知恵を出し合って議論し、どう指導することが、「人間としてよりよく生きる力を育む」道徳教育につながるのか、研究課題は多い。道徳の授業と関連する「特別活動」「総合的な学習の時間」「各教科」など、獲得した道徳的価値と実践や具体的行為とのつながり、また、地域や保護者を巻き込んだ道徳教育の推進も大きな課題である。地域や保護者を巻き込むという視点では、県教育委員会が主導する信州型コミュニティスクールの活性化という課題とも結びついており、道徳の分野においても、こうした方向を加速していければと考えている。

他領域との関連指導で、計画的に継続的に力をつけていくのは大事であるが、そのために本来の「授業のねらい」が曖昧になってはいけない。押さえるべき「道徳的価値」と、「主眼を明確にした実践」を持ち寄りたい。その実践をもとにした長野県道徳教育学会の各支部の研究会の開催が、一人一人の先生方の力を高めることになる。長野県道徳教育学会の研究会や実践研究授業をはじめ様々な活動を通して、道徳教育に関する理解や道徳教育研究の充実、道徳科の指導方法の工夫、実践、研究が盛んになり、子ども達の成長に寄与できればと考える。

謝辞

本講に目を通していただき、貴重なアドバイスを下さった住吉廣行学長並びに等々力賢治副学長に感謝いたします。

文献

- 1) 子どもと道徳 - 「道徳」の指導 - 吉岡正幸 著 信教出版部 (1992) P4
- 2) 子どもと道徳 - 「道徳」の指導 - 吉岡正幸 著 信教出版部 (1992) P5~6
- 3) 第一次安倍内閣の教育再生会議第二次報告書 2007年6月1日
- 4) 第二次安倍内閣の教育再生実行会議第一次提言 2013年2月26日
- 5) 文部科学省有識者会議「道徳教育の充実に関する懇談会」報告書 2013年12月26日
- 6) 中央教育審議会答申 2014年10月21日
- 7) 一部改訂された学習指導要領 2015年3月27日
- 8) 文部科学省資料「道徳教育の抜本的改善・充実」 2015年3月

研究テーマ「自分の生き方を見つめ直す道徳の時間のあり方」

本年度は上記テーマを設定し、主として「自分の生き方」に焦点をあてることのできる道徳の時間を追究してきた。1時間の授業としては、資料中の登場人物の行為から、登場人物の心の揺れについて生徒に問い、互いの考えを意見交換するという学習形態をととして、生徒の価値感を補充、深化、統合することを目指してきた。

当初、このような形態での授業展開により、次のような指導計画をたてた。

I はじめの指導案

1 主題名「さやかがくれたもの」

2 学年 3 学年

3 目標 2-(6) 感謝

相手の温かな思いを受けてもそれに気づけなかったり、気づいてもそれに応えることが少なかったりする生徒が、資料中の「あずさ」が合唱後にわかった気がした中身を考え、「あずさ」の思いと同じように感じた経験を想起し、述べ合うことをとおして、相手から受けた温かな思いに対して改めて感謝の思いがわき起こり、それにこたえたいという意欲が高まる。

3 展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	○発問 ・ 支援 ◎評価	時	備考
導 入	1 合唱練習を行い、その時の思いを語る。	<ul style="list-style-type: none"> 前よりも大きな声で歌えるようになってよかった。理由は何度も合唱練習を繰り返してきたから。 面倒くさいなあと思った。理由は長い曲で疲れるし、すでに何度も行っているから。 	<ul style="list-style-type: none"> 合唱後に合唱してみても感想を聞く。 	5	
展 開	2 資料を読む。読後感想を述べる。	<ul style="list-style-type: none"> あずさの合唱に消極的な部分に共感し、感想を述べる生徒がいるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 共感できる部分または疑問に思う部分には傍線を引くよう資料を読む前に伝える。 読後、線を引いた理由を述べるよう伝える。 前半部のあずさの言動に対する感想には共感的に受け止める。 	10	資料
	3 あずさの思いを考え合う。	<ul style="list-style-type: none"> さやかが机を運んだり、大きな声で歌う理由をどうしても聞きたかったのではないかな。 最後だから頑張りたいという思いではないかな。 みんなのためにという思いがさやかにあると考えたのではないかな。 以前に仲間に助けられたことへの恩返しで大きな声で歌ったのではないかな。 さやかがみんなのためにできることは歌なのではないかな。 	<ul style="list-style-type: none"> 昇降口であずさがさやかに話しかけた理由を述べるよう伝える。 あずさが考えるさやかが大きな声で歌う理由は何かな。 <p>補助発問</p> <ul style="list-style-type: none"> 大きな声で歌うことがなぜ「みんなのため」、「恩返し」につながるのか 	20	

終 末	4 自分の体験を想起し、語る。	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな声で歌えるようになってうれしかったのではないかな。 ・さやかみんなのためにという思いにふれて、温かな気持ちになったのではないかな。 ・さやかが歌の良さを教えてくれてありがとうという思いになったのではないかな。 ・合唱の時にあずさと同じような思いになったことがある。 ・部活動の時に他の人が頑張っているのを見て、私も頑張ろうという気持ちになれた。 	中心的な発問 ・さやかの思いを感じて、あずさはどのような思いになったのか。	10	学 習 プ リ ン ト
	5 本時の感想を述べる。	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の支えがあるからがんばれることがある。それを忘れずに生活したい。 ・自分ができること相手のためにがんばるとそれは伝わり、相手もうれしくなることがわかった。 	・あずさと同じような思いになったことはないだろうか。 ・本時を振り返り、学んだことを発表するよう促す。 ◎評価 お互いの心に相手を思いやる温かな思いがあることを自覚し、それを受けたときは応えたいという意欲が持てたか学習カードの記述から見る。		

資料中の登場人物の心情をじっくり考えることに重点を置き、そのうえで、登場人物の心情と自分の思いを重ね合わせた体験を語り合う展開とした。しかし、この展開では生徒が自身の体験を語り合う時間が十分に確保できないことになってしまう。さらに、2－(6)の指導内容「多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分がいることに感謝し、それにこたえる」の「相手の善意や支えにこたえる」というねらいに迫るには、生徒の十分な振り返りがなければならないと考えた。そこで、授業展開を再考し、次のような指導計画をもとに、1時間の授業の実践を試みた。

Ⅱ 変更後の指導案(実施 平成 20 年 9 月 22 日)

1 主題名「さやか、ありがとう」

2 学年 3 学年

3 目標 新2－(6) 感謝

相手の温かな思いを受けてもそれに気づけなかったり、気づいてもそれに応えることが少ない生徒が、資料中の「さやか」が合唱に大きな声で臨む思いを考え、さやかの思いと同じように感じた経験を想起し、述べ合うことをとおして、相手から受けた温かな思いに対して感謝の気持ちを伝えたいという意欲を持つことができる。

3 展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	○発問 ・支援 ◎評価	時	備考
導 入	1 合唱練習を行い、その時の思いを語る。	<ul style="list-style-type: none"> ・前よりも大きな声で歌えるようになってよかった。理由は何度も合唱練習を繰り返してきたから。 ・面倒くさいなあと思った。理由は長い曲で疲れるし、すでに何度も行っているから。 	・合唱後に合唱してみても感想を聞く。	10	

展開	2 資料を読む。読後感想を述べる。	<ul style="list-style-type: none"> ・あずさの合唱に消極的な部分に共感し、感想を述べる生徒がいるだろう。 ・さやかの言動に共感できないという感想を述べる生徒がいるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・共感できる部分または疑問に思う部分には傍線を引くよう資料を読む前に伝える。 ・読後、線を引いた理由を述べるよう伝える。 ・前半部のあずさの言動に対する感想には共感的に受け止める。 ・さやかに対する生徒感想を基に次の活動へつなげていく。 	10	資料
	3 さやかの思いを考え、自分の経験を述べ合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の文化祭だから団結したい、いい思い出を残したいと思っているから。 ・仲間のために頑張りたいという思いではないか。 ・あずさや机を運んでくれた人のために頑張ろうという思いではないか。 ・遅刻したときに机を運んでくれた人、水泳の時あずさが励ましてくれたことに応えたいという思いがあるのだろう。 ・相手からもらった嬉しさを、自分ができることで相手に返したいと思っているからではないか。 	<p>発問（中心的な発問）</p> <p>○なぜ、さやかは大きな声で歌うのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「最後の文化祭、団結」という叙述に拘る生徒には、「最後」「団結したい」とさやかに思わせる原動力は何かを問う。 ・水泳の時のさやかの思いとさやかが大きな声で歌うこととがなぜつながるかを問い、さやかの思いを深めていく。 	20	学習カード
		<p>補助発問1の反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある。以前、部活動で私がミスをしたときに、どんまいと声をかけてくれてとても嬉しかった。 ・文化祭の準備で困ったことがあった時、何気なく助けてくれる人がいた。その時とても嬉しかった。 ・保護者が部活動の大会の時にお弁当を作ってくれたり、ユニフォームを洗ってくれてあって嬉しかった。 	<p>補助発問1</p> <p>○さやかと同じような思いになった経験はありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「思いつかない」という生徒には、机が運ばれていた時、水泳の見学時のさやかの思いと同様の経験を書くよう促す。 ・「ある」と述べる生徒の経験から以下の問いかけで深めていく。 ・出にくい場合は、部活動、文化祭準備の具体的場面を提示し、経験を想起しやすくする。 ・経験のみ語る生徒にはその時の気持ちも尋ねる。 		学習カード
		<p>補助発問2の反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝えることができなかった。 ・「ありがとう」と伝えられた。 ・言葉では伝えられないけれど、態度で伝えていこうと思った。 	<p>○補助発問2</p> <p>その気持ちは伝えましたか。</p>		
		<p>補助発問3の反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・嬉しい気持ちになると思う。 ・温かな気持ちになると思う。 	<p>○補助発問3</p> <p>その気持ちを伝えられたら相手はどんな思いになるだ</p>		

終末	4 本時の学習を振り返り、自分の考えをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えられた時、嬉しくなったことがある。 ・自分が何気なくやっていることの中で相手のためになっていることがあることがわかった。そして、その思いは相手を嬉しいという思いにさせるんだと思った。 ・相手から受けた優しい思いを相手に返していくことは大切だと思った。言葉でうまく伝えられなくても言えなくても相手のためにと考え行動すれば、それは相手に伝わっていくと思った。 	ろうか。また、伝えられた経験はありますか。 ○今日の学習から学んだことで、これからの自分に生かしたいということをまとめよう。 ◎評価 お互いの心に相手を思いやる温かな思いがあることを自覚し、それを受けたときは応えたいという意欲が持てたか学習カードの記述から見る。	10	学習カード
----	--------------------------	--	--	----	-------

Ⅲ 実際の授業から

① 授業の記録(概要)

平成20年9月22日(月) 実施

時間	教師の出	生徒名	生徒の動き(表情、発言)
9:45			合唱曲「モルダウ」の歌練習を行う。
9:46		指揮者	「もう一度歌います。」
		指揮者	合唱をする。男声に一層、声に力が入る。 「全体的にまとまってきた。速さ、強弱に気をつけて歌おう。」
9:50	「はじめましょう。」		あいさつをする。
9:51	「朝よりもすごくいい合唱になっていた。歌い終えての皆さんの感想を聞かせてください。」	Oさん Yさん Kさん	「朝は声が出ていなかったけど、いい合唱になったと思う。」 「みんなで合唱をしているなという気持ちになった」 「音楽の先生に言われたことができていい合唱になっている。」
9:53	「今日の道徳の時間は人との関わりについて資料を基に考えよう」		配付された資料に目を落とす。
9:55	「これから資料を読みます。この気持ちわかるなあ」という部分には線を引いてください。」		資料の範読を聞く。資料に線を引く生徒は少ない。 ※生徒がどこに線を引いているか、教師は把握しきれなかったため、範読はテープで流すなど工夫が必要であった。
10:00	「どこに線を引いた？」 「何故そこに線を引いたのかな」 「そんな風に思ったことあるの」 「Nさんと同じ所に線を引いた人はいるかな」	Cさん Nさん	「清掃時に机を運んでくれていたという所です」 「なんとなく・・・心に残ったからです。」 「またか、いつまで続くのか」という所 うなずく 数名挙手
10:05	「先生はここに線を引いたよ。なんでこんなに大きな声で歌えるのという部分です。」 「ここに線を引いた人は」 板書 なぜさやかは大きな声で歌うのだろう。 「なぜかわかる」		挙手無し
10:06	「なぜさやかが大きな声	Sさん	「全くわかりません。」 「最後の文化祭だから」

～ 10:10	で歌うのか、あなたが考える理由を書いてください。」		「頑張った後にある達成感を得たいから」 「みんなへの感謝の気持ちを表すため」 上記の内容を生徒は書く。
10:10	「顔を上げて、筆を置いてください」 「私も最後の文化祭だから悔いを残したくないという思いなのかと思っていたけれども、こんな考えもあるのかとはっとさせられました。Hさんの書いたものを読んでください。」 「Fさんはそういう経験あるの」	Hさん Fさん	「一緒に歌えるのは最後だし、さやかはみんなへの感謝の気持ちを大きな声で伝えようとした。」 「水泳で休んでいたとき声をかけてくれたことへの感謝から。」 うなずく ※体験を語る時間を多く確保するために、ねらいに迫る内容を抽出して、全体に広めた。
10:15	「みなさんはさやかと同じように思った経験はありますか。目を閉じて思い出してみてください。目を開けてください。それでは思い浮かんだことを書いてください。」		合唱での体験や日々の友だちとの関わりの中での体験を書く。
10:25	「発表してください。」 「その時の気持ちは」 「その気持ちは返してみた？」 「その気持ち Iさんに返した？」 「その気持ち Cさんに返した？」 「その気持ち返した？」	Tさん Iさん Oさん Yさん	「生徒会準備で清掃時間に遅れそうになったとき、誰かが私の机を運んでくれてあった。」 「うれしかった」 首を横に振る。 「部活動の後に 1人で帰ろうとしたら Yさんが待っていてくれてうれしかった」 「ありがとうという言葉で伝えた」 「ひどいことを Cさんに投げかけたけど、次の日 Cさんは自然に接してくれたことがうれしかった」 「言葉ひとつひとつに気をつけようと思って接している。」 「Mさんが筆記用具を貸してくれたことがうれしかった」 「まだ返していない。Mさんが困っていたらこれから返したい」 ※2-(6)「こたえる」のねらいに迫るために、「その気持ちを返した？」という問い返しを行った。
10:30	「今日の学習からこれからの自分に活かしたいことを書いてください」	Gさん Oさん	人からされた親切は、言葉か何か行動で返していきたい。 自分がされてうれしかったことは、相手を大事にする気持ちを持っていれば必ず伝わっていくと思う。
10:35	「私はみなさんから感謝という気持ちを教えてもらいました。ありがとう。」		あいさつをする。

資料 「さやか、ありがとう！」

文化祭まであとわずかとなり、どのクラスも文化祭準備に力を入れている。特に合唱練習は熱が入っている。あずさたちのクラスも、合唱練習を繰り返してきた。しかし、あずさは気乗りしなかった。できることなら合唱から逃れたかった。あずさは、クラスマッチでは中心となって活動し、クラスの勝利に貢献していた。普段はクラスで目立つ存在だったが、合唱となると、急に目立たなくなってしまう。

今日も合唱練習が始まった。歌う度に指揮者が合唱の課題を指摘し、練習を繰り返していた。「またか」「いつまで続くのだろう・・・」合唱中、あずさは心の中で繰り返していた。合唱後、指揮者でもある学級長が、全員に向かって訴えた。「こんな合唱では金賞はとれない！最後の文化祭なんだからもっとみんなで声を出し、団結しないと・・・」「また団結かあ・・・」あずさは心の中でつぶやいた。あずさの後ろにはさやかがいる。さやかは美しい大きな声で合唱をしている。普段は無口で1人であることが多いさやかだが、合唱の時はさやかの歌声が響きわたっている。「なんでそんなに歌えるの？」あずさはさやかのことを不思議に思えてならなかった。

清掃の時間になった。前の時間が生徒会の時間で、全校生徒が文化祭準備のため、教室へ戻る時間も惜しんで仕事をしていた。教室にはそこで生徒会活動をしていたあずさ、さやかを含め数人の生徒しかいなかった。そこにいたほとんどの人たちは清掃分担場所へ移動していった。教室は机や椅子が、全く運ばれていない状態だった。あずさは、自分の前の席が運ばれていないことにため息をついた。「これって、もしかして、私が全部運べってこと？」あずさも自分の机をそのままにして清掃分担場所へ向かうことにした。着替えを済ませ、教室を出ようとすると、さやかがひとり黙々と机を運んでいる。あずさの机は運ばれていた。

帰りの会で放課後にパート練習を行うとパートリーダーたちが言いだした。あずさは「え？またあ。塾だってあるのに。」と思ったものの、皆がやるというので渋々参加した。やると言い出したパートリーダーたちは、私語をしていて、いっこうにパート練習をする気配がない。「こんなことならやらなくたっていいのに。」あずさは思った。そんな中、さやかはひとり歌詞を小声で歌っている。すると、周りに仲間が集まり、自然にパート練習が始まった。

降口を出ると、さやかが前を歩いていた。中学に入ってから、あずさはさかとはほとんど話したことがなかったが、思い切って話してみようと思いやかのもとへ近寄った。

「ねえ、さやか。」
「あずさ、どうしたの？」
「今日、掃除の時に私の机を運んでくれてたけど・・・」
「私が遅刻したとき、私の机、誰かが運んでくれてあって・・・おたがいさまかなって思ってた。」
おたがいさま？私はさやかの机を運んだ覚えはないし・・・何もしていないけど・・・ 45

「さやか、なんであんなに大きい声で歌うの？」
「みんなと一緒に歌えるのは最後だし・・・水泳の時、私が1人で見学をしていたら、あずさは「大丈夫」って声を掛けてくれたよね。」 50
「水泳の時？」
そういえばそんなことあったけ。1人でさやかが座っていたから、軽く声を掛けただけなんだけど。でも、なんでそれが大きい声で歌うことになるの？
「あずさ！」後ろからいずみが2人の間を割って入ってきた。 55
「あずさ、昨日のドラマだけどさあ・・・」
あずさの疑問はさやかに聞けずじまいだった。

合唱コンクール当日、あずさたちのクラスの番になった。ステージに立つあずさの足が震えた。みんなが私のことをどう見ているだろう・・・その思いであずさの心はいっぱいになった。 60
合唱が始まった。後ろからさやかの美しく大きな歌声が聞こえる。その歌声に、あずさはつつまれていくように感じた。すると、足の震えは消え歌うことへの自信がわいてきた。あずさは今までにない声量で歌っていたステージを下りる時、あずさは合唱っていいなあとしみじみ思えた。こんな風に思えるのはあずさは初めてだった。 65

その時、あずさはわかった気がした。さやかに聞いたかった、大きな声で歌う理由が。

(生徒の体験を基にした授業者による自作資料)